

# 『太平広記』鬼部説話の構成 — 鬼二十六〜鬼三十 —

The ghost stories of "Taping Guangji" vol.26 ~ vol.30

三田 明 弘  
MITTA Akihiro

## はじめに

本稿は、唐代までの中国鬼話の集大成である『太平広記』鬼部説話四十巻のうち、巻三四一「鬼 二十六」から巻三四五「鬼 三十」までの鬼話の特徴を分析しつつ、盛唐期の鬼話の特徴を解き明かすことを目指したものであり、論者の既発表論文「『太平広記』鬼部説話の構成—鬼一〜鬼十—」<sup>①</sup>及び「『太平広記』鬼部説話の構成—鬼十一〜鬼十五—」<sup>②</sup>「太平広記」鬼部説話の構成—鬼十六〜鬼二十—」<sup>③</sup>「『太平広記』鬼部説話の構成—鬼二十一〜鬼二十五—」<sup>④</sup>の続編である。

右の四本の論文において、巻三一六「鬼 一」から巻三四〇「鬼 二十五」までの説話を分析し、鬼話の代表的な話型パターンを7種類に大別した。以下にそれを掲げる。

①冥婚譚 男が女の鬼と結婚するパターンが多く、女と男の鬼の例は少ない。跡継ぎの子を産む場合も有るが、夫婦は長く共に暮らすことはない。

②塚墓宿泊譚 一夜の宿を借りた家が、翌日見ると墓であったという話。冥婚譚にもよく見られる話型である。

③変鬼帰還譚 鬼となった家族や友人が帰ってくる話。死後の自分の身分・境遇、鬼ゆえに知り得る現世の人々の未来、冥界の秘密などを鬼が語る。仏教の影響が強まるにつれて追福を求めるパターンも増えてくる。再婚した配偶者への憎悪から鬼が出現し、かつての妻や夫に危害を加える例も多い。

④冥界召喚譚 冥界の吏である鬼が人を冥途に召喚する。命に従い冥途に赴く話もあるが、賄賂や身代わりなどの手段で死を免れようとする話が多い。

⑤鬼神遭遇譚 外や自宅(廁)の例も多い)などで鬼に遭遇するという話型。逃げたり争ったりする展開の場合は、その場で取り殺されなくても、間もなく絶命する話が多い。鬼神に改葬や廟の修復を依頼されるといいうパターンも少なくない。

⑥凶宅鬧鬼譚 家に鬼が居着いて、家人を悩ませるといいう話型である。

その家の元の持ち主であったり、外から来たり鬼の出自も様々であるが、振る舞いも騒霊現象程度から家人の命を奪う話まで多岐にわたる。食を盗む、食を求めるといふ要素が多く、話に見られる。例は多くないが、その家の人を助ける鬼の話もある。

⑦冥事占判譚 人の運命(冥事)を知ることが出来るということが鬼の大きな特徴の一つであるが、優れた道士などは、鬼と同じように冥事の情報にアクセスできる。そのような人間が、人の運命に関する情報を知り、予言したり運命を操作したりする話。

本稿では巻三四一「鬼 二十六」から巻三四五「鬼 三十」までの全所収話の標題と談刻本『太平広記』に記す典拠、説話内容の概略を掲げ、それを右に掲げた話型一覽に基づき、話型毎に分類した上で分析を行う。

#### 一 台頭する進士階級―巻三四一「鬼 二十六」―(唐徳宗・貞元年間)

李俊(『続玄怪録』) 進士科の試験に何度も落第していた李俊は、貞元二年(786)の試験の合格発表の前日、偶然、冥官に饅頭を恵んでやり、自分が不合格である事を告げられ、冥府の名簿に記された合格者の名を自分の名に書き換えて貰った。その際、はじめは李夷簡の名を書き換えようとしたが許されず、李温の名を書き換えた。そして、現世の実際の名簿も、知人である國子祭酒の包佶が尽力し、冥府の名簿と同じように李温の名が李俊と書き換えられ、合格できた。その後、李俊は官途において何度も降格された後、岳州(湖南省岳陽県)の刺史となったが、まもなく死んだ。

李赤(『独異志』) 貞元年間(785〜805)、呉郡(江蘇省・浙江省)

の進士李赤は、趙敏之と閩(福建省)に行く途中、衢州信安(浙江省衢州市)近くの馮亭で夕暮れに女鬼に取り憑かれ、「郭氏の聿に選ばれました」と親に書き置きし、女鬼に縊り殺されそうになった。趙が大声を上げて女鬼を追い払い、翌日は建中馮亭に宿泊したが、白昼に李赤がいなくなり、厠に座っているのを趙が見つけると、儀式を邪魔されたと怒った。十日後、閩に到着し、現地の役人に李赤の旧知がおり宴席を設けてくれたが、また李赤がいなくなったので趙が慌てて厠を探すと、李赤は地に伏して息絶えていた。

韋浦(『河東記』) 韋浦は寿州(安徽省)から任官のため都に行く途中、閩郷(河南省閩郷県)の宿で婦元昶という男を下僕に雇った。婦元昶は主人の馮六郎、絳州(山西省)の軒轅四郎と共に閩郷にやって来たが、主人と仲違いして置き去りにされ、閩郷を通れなくなったので同行させて欲しいとのことであった。茶屋で休んだ際、婦元昶はひそかに術で金縛りにした茶屋の牛を、皆の前で治してみせて茶屋の主人から茶二斤をせしめ、それを韋浦に献上した。潼関の宿に宿泊すると、婦元昶は門前で遊んでいた宿の幼い息子を背中をついて悶絶させた。宿の主人は巫女を呼び、巫女が琵琶を奏でて迎えた金天が婦元昶の仕業と見抜き、子供を蘇生させる方法を示した。韋浦も婦元昶を憎んだ。婦元昶は華嶽神に罰され、翌日、赤水の西で韋浦の前に現れ、自らが鬼であり、本来の主人馮六郎とは河伯のことであることを明かし、また韋浦が元の勤務地の県令を授けられることを予言して去った。その言葉通り、韋浦は霍丘(安徽省六安市)令に任じられ、赴任の途次、再び赤水の西を通り、婦元昶に手向けをした。

鄭馴(『河東記』) 門下省の典儀官に任じられていた貞元中の進士、鄭馴は、華陰県(陝西省華陰市)の南に莊園のある名望家であった。渭橋

の給納判官高叔讓と親しくしていたが、高の家で膾を食べて霍乱を發し、死んでしまった。暑い時分であったので、高の方で手厚く棺や副葬品を整え、十数日をかけて棺を華陰県に歸した。その頃、村の士人の李古道は、潼関の西、永豊倉路で鄭駟が多くの子や下僕を引き連れているのに遇い、華陰の岳廟の近くまで同道した。その後、李古道は、既に鄭駟が亡くなっており、昨晚、棺が莊園に歸ったことを県城で聞いて、急ぎ莊園に向かい、その事実であることを知り、我が身に禍があることを心配した。その後も都の繁華街で鄭駟に行き会った者らがあり、鄭駟の様子は李古道が見たのと同じであったが、言葉を交わすことはなかった。

**魏朋**（『玄怪録』） 建州（福建省）の刺史であった魏朋は、退官後、南昌（江西省南昌市）に客居していた。詩を作る趣味などない人物であったが、病気で意識を失った後、誰かに導かれるように筆を求めて詩を書いた。内容は、故郷から遠く離れた所に葬られた女鬼が夫に忘れ去られる寂しさを詠んだもので、まるで亡妻が魏に向けて書いたような詩であった。それから十日余りして、魏は死んだ。

**道政坊宅**（『乾牒子』） 貞元中、長安の道政里十字街の東に小さな屋敷があり、住む者に必ず災いが起きた。ただ、当時の進士の房次卿は、借りて住んでも何事もなく、世人にもと囃された。後に東平節度使（淄青平盧節度使）の李師古が買い取って進奏院（節度使が首都に設置した機関）とした。進士に合格したばかりの李章武は、早朝、人の出払った、この屋敷で、僮僕（の翁）と、人や驢馬の骨を盛った天秤籠を担いだ媪が「四娘子、どうしたのだね」「高八丈殿、最近は騒がしいので、この屋敷を去ることにしました」と話しているのを聞いた。ある人は「李章武はこのような人だから、美女とその装飾品を手に入れたのだ」（この言葉の意味は分析部分で解説する）と言った。

**鄭瓊羅**（『西陽雜俎』） 貞元の末、段文昌の從弟の某は信安（浙江省衢州市）から洛陽に歸る旅で瓜洲（江蘇省揚州市）で船中に宿泊し、晩に琴を奏すると外で嗟嘆する人がいた。その夜、憔悴して衣服もぼろぼろの女が夢に現れ、鄭瓊羅と名乗った。もとは丹徒（江蘇省鎮江市）に住んでいたが身寄りを無くし、揚子県（江蘇省儀徵市）に来たが、市吏の息子に乱暴されそうになって自害し、夢告や冤氣で訴えようとしたものの県令に伝わらず、恨みを抱いたまま四十年が過ぎ、琴の音に引かれて現れたのであった。その後、某は洛北の河清県（河南孟津县）温谷に住む妻の弟、樊元則を訪ねた。樊は特殊な方術を使うことが出来、某に女鬼がついて来ていると見抜いて、灯火を掲げ、香を焚いてお祓いを行った。すると女鬼が筆と紙を求めたので灯火の影に投げてやると、暫くして落ちてきた紙には幽霊の恨みを述べた七言詩二百六十二文字が書かれていた。鬼の書いたものはすぐに消えてしまふと言って、樊は詩を書き写させた。明け方には、紙は煤で汚れたようになっていて、字はもう消えていた。夕方に酒食や紙銭を供えて紙を焼くと、灰が真っ直ぐ上って行き、悲泣する声が聞こえた。

卷三四一「鬼 二十六」は、卷三四〇「鬼 二十五」に引き続き、徳宗の貞元年間の出来事を記す。多くの話は主人公は進士であり、安史の乱以降、貴族階級が衰退してゆき、科挙官僚が進出してくる時代相が窺われる。

**冥婚譚**

「李赤」は、駅亭に巣くう女鬼が客を縊殺しようとするという類型的な説話で、卷三三七「鬼 二十二」所収「李咸」も同系統の説話である。本話は鬼が場所に縛られず、旅の目的地まで追ってくる点に特色がある。

## 変鬼帰還譚

「鄭馴」の主人公鄭馴は、科挙に合格した進士であるが、都から遠くない華陰県に莊園を持つ貴族でもある。死後も都の繁華街に没する鄭馴が引き連れる豪華な行列は、実は副葬品である冥器に過ぎない。没落してゆく貴族階級の空疎さを象徴する鬼である。鄭氏の始祖について、『鄭氏宗譜』（裕昆堂 民国二〇年）に「鄭友。周宣王封弟友於鄭、其地載榮陽宛林、秦京兆漢華陰鄭県是也。後裔以国爲氏。」と記されている。「魏朋」は、亡妻が魏に取り憑いて詩を書かせ、更に黄泉路に連れて行ったと解釈すべき話であることが、話中で示唆されている。

## 鬼神遭遇譚

鬼神遭遇譚は、鬼が人を害する話が多いが、人の手助けをする話もあり、「韋浦」は後者という事になる。ただ、仕える主人を利するために他人の牛や子供を害するのであるから、それらの人々の側から見れば、やはり鬼が人を害する話となる。

「鄭瓊羅」の冒頭に名の見える段文昌は、『西陽雜俎』の作者段成式の父である。同巻の「魏朋」もそうであるが、鬼によって書かれた詩に対する興味が説話の核となっている。

## 凶宅鬧鬼譚

「道政坊宅」で李章武のことを「このような人だから」と言っているのは、凶宅の原因と思しき二鬼と遭遇してもなかなかなかったような男だから、女鬼と愛し合い、その宝の玉を貰うことも出来たのだ、という意味と考えられる。「李章武」(卷三四〇「鬼 二十五」所収)において、李章武が恋人の女鬼から鞅鞅の玉を貰ったことを踏まえているのである。

## 冥事占判譚

「李俊」では、人間の他の運命同様、毎回の科挙の結果も冥界において予め定められており、冥官の手にある名簿を書き換えることによって、現世の合格者名簿も連動して書き換えられることが示される。その中で、柳宗元と交流のあった李夷簡の名が、書き換えることの許されない名として登場する。これは李夷簡が後に尚書左僕射となることを踏まえているのである。『太平広記』卷一七二「精察 一」には、進士科合格前の臯丞であった李夷簡が、朱泚の乱の際に、賊軍の使者を見抜いたことを記す。

## 二 亡国の記憶―卷三四二 鬼二十七―(唐徳宗・貞元年間)

**独狐穆** (『異聞録』) 貞元中(785~805)、河南(河南省)洛陽の独狐穆は淮南(安徽省淮南市)への旅で、夜、大儀県(江蘇省儀徴市)の宿に向かっていたが、馬に乗る美しい侍女を見て声をかけ、その女の住む館へ行って行った。侍女に、あなたは隋の將軍であった独狐盛の子孫ではないかと尋ねられ、穆が八代目の孫であると答えると、彼女の仕える十三四歳の美女、楊県主が手厚くもてなしてくれた。楊県主は、隋の煬帝の次男齊王(楊暕)の娘で、二百年前、隋が滅亡した時、父とともに殺害されたが、その際、大臣や宿将の中で独狐盛だけが賊軍に抵抗して奮戦した。県主は賊に迫られ、相手を罵って殺されたのであった。穆は、隋末の人や出来事について尋ね、県主の話は、ほぼ『隋史』と同じであった。共に飲酒し、県主は悲しみや穆への想いを詩にして穆に贈った。穆はその文才に驚き、返礼に自らも詩を賦した。やがて大將軍来護児の歌妓も呼ばれて数曲歌い、酒宴に興を添えた。彼女も当時殺害されたのであった。穆と県主は歌で想いを伝え合い、その夜、夫婦の契りを

結んだ。県主の気は昂ぶっているようであったが、その体は冷たかった。県主は穆に淮南からの帰りに自分の遺体を掘り出し、洛陽の北の丘に改葬しよう依頼した。また、彼女を妾にしようとして狙っている悪王鬼の妨害への対策として、淮南の道士王善交の護符が鬼神を制することを教えた。穆は淮南で王善交から護符を入手し、悪王の墓の辺りで旋風に襲われたが、これを止めた。正月に江南から還り、県主の骸骨を掘り出し、洛陽に戻って安善門外に改葬した。その夜、村の別荘に泊まっていた穆の前に県主が立派な車に乗り、お付きの者を従えて現れ、己卯の歳になればお会いできますと言ひ、その夜は泊まり、翌朝去って行った。これらのことは穆が語り、親しい友人や親戚は皆知っていた。貞元十五年（799）己卯の歳、明け方に穆が外出しようとする県主の使いの車数輛が現れ、穆は再会の日が来たかと言った。その朝、独孤穆は急に病付いて死亡し、県主に合葬された。

**華州參軍（『乾驥子』）** 華州（陝西省）の柳參軍（柳生）は名族の出であったが、親兄弟も欲もなく、官職を捨て長安でぶらぶらしていた。三月三日に曲江の浅瀬に車を止めて蓮の花を摘ませる美女に見つめられ、その車を馬で追い、美女が永崇里に母と暮らす崔氏である事を知った。崔氏の伯父である執金吾の王が、息子と崔氏を縁組みさせるよう崔氏の母に言ったが、崔氏は柳生に一目惚れしており、王家に嫁ぐことを嫌がった。母は兄の言うことに逆らえず結婚を承知したが、崔氏の柳生への気持が深いことを知り、侍女の軽紅に、秘かに柳生と崔氏を結婚させてしまいたい旨を、柳生に伝えさせた。柳生ははじめ軽紅の誘いと勘違いして喜んだが、事情を聞き、大喜びで結納金を準備して崔氏と結婚し、夫婦は軽紅も連れて金城里に居を構えた。母は、崔氏がいなくなったことを、兄の息子が婚礼を待たずに扱かしたのだと欺き、王は自分の息子を鞭

打った。その後、崔氏の母が亡くなり、その喪に柳生夫婦が赴くと、それを王の息子が見て、父に告げた。訴訟になり、王家の方が先に結納を行っていたので、崔氏は王の息子の妻となった。王の息子の王生は崔氏を好いていたので、過去にこだわらなかつた。やがて父の王が死に、王家は崇義里に転居した。崔氏は王生に仕えるのが憂鬱で、軽紅に柳生がまだ金城里に住んでいることを調べさせて二人で会いに行き、柳生と三人で群賢里に住んだが、夫に見つかり連れ戻された。崔氏はなんとか戻るのを免れようと妊娠に託けたが、王生の想いは深く、責めることなく、また妻とした。柳生は江陵（湖北省荊州市）に去った。二年後、崔氏と軽紅が相繼いで亡くなり、王生は深く悲しんだ。春二月、その死を知らぬまま崔氏を思う柳生の前に、王生とは別れたのだと言って崔氏と軽紅が現れ、二年間ともに暮らした。しかし、王生のかつての下僕に見つかり、王生が江陵にやって来た。王生は門外から崔氏が化粧をしている姿を見て絶叫した。崔氏は王生に対して恨みはなく、柳生は王生を賓客のようにもてなした。にわかには崔氏がなくなり、柳生と王生は不思議がるばかりであった。二人は共に長安に行き、崔氏の墓を開くと、江陵で使っていた化粧品が入っており、衣服や遺体も傷んでいなかった。軽紅も同様であった。柳生と王生は、改めて二人を葬り、終南山（陝西省）の道觀に入り、帰らなかつた。

**趙叔牙（『祥異記』）** 貞元十四年（798）夏五月、旱魃が起きた。徐州（江蘇省徐州市）の無役の將軍、趙叔牙は、新居に現れた呉の時代の人、劉得言の鬼に頼まれ、趙の寝台の下に埋まっていた劉の骸骨を掘り出し、劉の妻の墓である城南の台雨山の麓にある大樹の東に葬った。劉は趙に感謝し、三日以内に雨が降るから、そのことを長史（大都督の幕僚長の意であるが、節度使を指す）に告げるよう言った。しかし、趙は

雨乞いの祈祷を行って三日以内に雨を降らせると節度使張建封に申し出て、石仏山に祭壇を設けた。三日目になっても雨は降らず、当時、徐州は反乱軍と隣接していたので、張建封は趙の行動を何らかの陰謀と考え、夕刻、趙を杖殺した。夜に大雨になり、趙のため祭祀が行われ、趙の息子が散騎常侍の地位を与えられた。趙叔牙は鬼の知らせでくれた雨の降る時期を隠して自業自得で死んだのだと人々は言った。

**周済川(「祥異記」)** 汝南(河南省・安徽省)の周済川は、兄弟みな学問を好んだ。揚州(江蘇省揚州市)の別荘で講義を受け、皆が就寝した時、窓外に白骨の子供が現れ、挨拶の仕草をしたりした。済川の弟の巨川が怒鳴りつけたが、子供は部屋に入ってきて「お母ちゃん、お乳を頂戴」と言い、巨川が平手打ちにすると倒れたが、猿のように素早く寝台に上った。家の者が刀や棒を持ってきて打つと、関節がバラバラになったが、その度にまた元に戻るのであった。家の者が布袋に包んで捨てに行く間も、まだ乳を求め続けた。四五里先の涸れ井戸に捨てたが、翌晩もやって来たので、今度は布袋を縄で括り、大石を繋いで川に沈めた。子供は「昨日と同じように遊びに来ただけだよ」と言った。数日してまた来たので、大木の中を割り貫き、子供を中に入れ、鉄板で両端を塞ぎ、鉄の鎖を巻き付け、巨石を繋いで大河に流した。子供は「棺桶に入れて見送ってくれるなんて、ありがとう」と言い、もう来なかった。貞元十七年(801)のことである。

卷三四二「鬼 二十七」の説話も、徳宗の貞元年間を時代背景とする。冥婚譚は、人物の心理をより細やかに表現するようになっていく。安史の乱という亡国に近い体験の記憶や、地方軍閥の跋扈が、時代の空気として説話の背後に看取される。

#### 冥婚譚

「独孤穆」は、話型としては『遊仙窟』を踏襲するものであり、「歴史上の人物との冥婚」というモチーフの系譜にも連なる話である。県主の父、楊暉は眉目秀麗であったと伝えられており、一時は権勢を誇ったが、後に失脚した人物。本話の特色は、亡国の悲しみや真の忠臣が如何に稀少であるかが強調されている点にある。各人の忠と不忠が明らかになった安史の乱の記憶が、本話の背景にあることが窺われる。出典として掲げられている『異聞録』は、『新唐書』『芸文志』に著録される『異聞集』の誤りである可能性が指摘されている<sup>6)</sup>。

人妻が、霊や蘇生者となって恋人と暮らし、元の夫と訴訟になるのは、冥婚譚の一つの類型であるが、「華州參軍」は生前に訴訟問題が起き、鬼となった妻が二人の夫の出家の契機になるという点に特色がある。また、柳・崔・王は典型的な名族の姓であり、本話を貴族階級の没落という点から見ることも出来よう。

#### 鬼神遭遇譚

鬼神の教えてくれた情報を利用して功績を得るのは鬼話の類型の一つであるが、「趙叔牙」では、天災を自らの出世に利用とした趙叔牙の振舞を、身を破滅させるものとして指弾している。貞元四年、徳宗は徐・泗・濠の三州を併せ、徐泗濠節度使を設置し、張建封を任命した。叛服常ない平盧軍に隣接する要衝として重視される地域であった。張建封は、死後に司徒或いは司空を追贈されている。本話において、趙叔牙は平盧軍の内通者と勘違いされたのである。趙叔牙の息子が任じられた散騎常侍は名誉職で実権はない。

#### 凶宅鬧鬼譚

「周済川」において、子供の骸骨はおそらくは野ざらしであったので

あろう。本質的には供養を求めていたわけであるが、それを言葉に出来ず、いたずらを繰り返したのは子供の鬼たる所以か。空洞にした大木に押し込めたのが、図らずも遺骨の納棺となったのである。

### 三 貴族文化の衰退―巻三四三 鬼二十八―(唐憲宗・元和年間)

陸喬(『宣室志』) 元和(806～820)の初めのある夕、丹陽(江蘇省鎮江市)の進士、陸喬のもとを梁代の文人政治家、沈約が訪れた。詩作に秀でて、客を好む陸喬を好ましく思ったのであった。沈約は、友人の范雲と、自分の息子の青箱も呼んで、陸喬に紹介した。十歳余りの青箱は聡明で、沈約は自らの学問を継承させるつもりであったが、青箱は沈約より先に死んだのであった。沈約に命じられ、青箱は、最近、台城(江蘇省南京市 東晋から南朝時代的首都)を通過した際の感慨を、都の盛衰を主題とする詩に詠んだ。陸喬は嘆賞しつつも、その詩が、『文選』に見られる齊梁体でなく、唐の沈佺期・宋之問以来の近体詩である理由を尋ね、沈約は、現代に詩を作れば近体になるのは当然であると言った。范雲は、南齊の時代、沈約・謝朓・任昉らとともに竟陵王蕭子良の文学サロンに出入りしていた日々(范雲・沈約らは「竟陵八友」と称された)を懐かしみ、梁の武帝の即位後は二人とも重臣となったが、常に憂いの中にあつたと言ひ、沈約もため息をついた。沈約は、郢州(湖北省武漢市)の蔡公(蔡興宗)の記室(秘書官)であつた時、沈約と范雲は将来、端揆(宰相)になるが、台司(三公 大尉・司徒・司空)にはなれないという夢告を得ていたことを話し、人事は天命で決まっていると言ひ、陸喬にこの地で二年以内に兵乱が起きることを告げて去つて行つた。それから一年余りして李錡の反乱が起き、更に一年後、陸喬は

死んだ。

廬江馮媼(『異聞録』) 廬江郡(安徽省)の農婦馮媼は、夫が死に、子もなく、貧しく、村人たちからも見捨てられていた。元和四年(809)、淮楚(江蘇省・安徽省のあたり)が不作になり、馮媼は舒(安徽省廬江県 廬江郡の郡治所であつた)に食を求めて行く途中、暗くなつて風雨に遭ひ、路傍の家に一夜の宿を求めた。その家では、三歳の娘を連れて二十歳余りの美しい女が、その舅・姑に責められて泣いていた。女は淮陰県(江蘇省淮安市)の県令梁倩の娘で、鄆県(河南省永城市)の丞(次官)である資産家の董江の妻であつた。董江が別の妻を娶ることになり、舅・姑は、女の竹かごに入れてある裁縫道具や祭祀に使う道具を取り上げ、新妻に渡そうとして、女を責めているのであつた。美味しい食事とゆつくり休める寝床を恵んで貰つて、媼は翌朝その家を辞した。桐城県(安徽省桐城市)まで来ると、豪邸で董江の婚礼が行われており、媼は村人から董江が結婚するのは、妻と娘が死んだからだと聞かされた。媼が昨夜泊まつたのは、その墓のある場所であつた。董江は妖しい妄言を為す者として媼を追い払つたが、村人たちは媼の話に感嘆した。元和六年(811)、江淮(江蘇省・安徽省のあたり)の従事(刺史の秘書)李公佐は公務で都に行つた帰り、漢南に泊まり、渤海の高鉞、天水の趙償、河南の宇文鼎らと見聞した怪談を語り合つた。この話は、高鉞が詳しく語つた内容を李公佐が伝に纏めた。

寶玉(『玄怪録』) 元和年間、省試受験の推薦を求めて同州(陝西省渭南市)に来た郷貢進士の王勝と蓋夷は、宿に空きがなく、郡功曹(郡吏)の王翥の屋敷の西廂の対の部屋を借りたが、とても狭かつた。母屋の部屋を、処士の寶玉が荷物葛籠一つだけで一人で借りていたので、相部屋を頼んだが断られた。その夜おそくに、寶玉が一人ではいるはずの部屋

から不思議な香りと賑やかな声があったので王勝と蓋夷がいきなり中に入ると、十人余りの侍女に傅かれながら寶玉が妖麗な美女と食事をしていった。翌朝、王勝と蓋夷が問い詰め、話さねば妖術のような振舞を郡の役所に訴えようとすると、寶玉は次のような秘密を打ち明けた。寶玉はかつて太原（山西省太原市）への旅の途中、日暮れに道に迷い、汾州（山西省臨汾市）の崔司馬（地方官）の館に一夜の宿を借りることになった。話してみると、崔司馬は寶玉の母方の親戚である事が分かり、家が零落し寶玉が学資を得るために旅をしていることを哀れんだ崔司馬は、自らの侍女を妻として寶玉に与えた。しかし、実は崔司馬の館があったのは冥界で、妻も幽霊であったので夜のみ現れるのであった。崔司馬は、また、使っても減らない絹百疋も葛籠に入れてくれたのであった。寶玉は絹三十疋づつを王勝と蓋夷に口止め料として贈り、去っていった。

**李和子（『酉陽雜俎』）** 元和の初め、上都（長安）の東市の不良、李和子は残忍な性格で、よく犬や猫を盗んでは食い、市の人々の迷惑となっていた。ある時、二人の紫衣の冥吏が現れ、犬猫四百六十匹の訴えにより李和子を冥界に連行しようとした。李和子は二人を茶店に連れ込もうとしたが、二人が鼻をつまんで入ろうとしないので、居酒屋に連れて行き、酒を飲ませて命乞いをした。市の他の人には李和子の姿しか見えず、李和子が気が触れたのだと思った。冥吏らは酒の礼として、翌日の昼までに四十万銭を準備すれば三年延命させると言った。李和子は承諾し、居酒屋を出た。その際に、飲み残しを飲んでみると、酒は水のような味になっており、ひどく冷えていた。李和子は約束通り報酬を準備して燃やし、二人が銭を持って行くのを見た。しかし、三日後に李和子は死んだ。幽霊の三年とは、この世の三日のことであった。

**李億伯（『乾驥子』）** 隴西（甘肅省）の李億伯は、元和九年（814）

に温県（河南省焦作県）の知事となった時に私（温庭筠）に次のような話をした。元和の初め、科挙に合格して上都（西安）の興道里に寓居していた頃、朝早くに崇仁里に住む同期の合格者に会いに行く途中、失意の体の喪服を着た三尺の小人の女が大声で「散々耐えてきたが決着をつけねば。決して許しはしない。」と言って、爪弾きをして「奇妙だ、奇妙だ。」と言っているのを見た。この女は日暮れにも車馬の賑やかに行き交う大通りで人々を不思議がらせていた。そのようなことが数日続き、この女を見る野次馬の数は増え続けて大変な数になり、さながら劇場のようになっていた。その中には子供もたくさんいて車座になって座っていた。小人の女が自分の顔を布で包んで話す言葉が支離滅裂になると子供たちは笑い、子供が近づくと女は捕まえようとし、子供は逃げるのであった。昼になって見物はますます増え、女が座ると、一人の子供が女の頭を覆っている布を引く張った。布は地面に落ち、女がいたところにあったのは三尺の青竹に髑髏を掛けたものであった。金吾（禁軍）がこの出来事を帝に奏上した。

「卷三四三 鬼二十八」は、憲宗の元和の初期の鬼話を収録している。六朝貴族文化は遠い過去となり、賑やかな都市の描写は庶民的文化の台頭を予感させる。

#### 冥婚譚

「寶玉」は、美女や宴席の用具一式を隠し持って旅をする男の話のパターンであり、類話としては南朝梁・吳均編『統齊諧記』所収の「陽羨書生」がよく知られている。さらに遡れば『雜比喩經』等の仏典にルーツがあり、『千夜一夜物語』の枠物語にも採用されている。本話は、これと冥婚譚を組み合わせた構成になっている。



塚墓宿泊譚

「廬江馮媪」は、二人の不幸な女の物語である。二人は社会階層も、苦悩の質も全く異なり、互いの苦しみに対する共感はない。しかし、おそらくは幾分かかの憐愍から董江の妻は馮媪に食事と寝床を与え、馮媪は囚らざるも董江に妻の恨みを伝える役割を果たした。結果として互いに助け合った暗合の妙味と、リアルな人物描写が本話の魅力である。

鬼神遭遇譚

「陸喬」は、史上の人物との邂逅という類型に属する説話である。斉梁の盛衰を振り返る鬼として創作された沈約と范雲は、安史の乱以前の長安の繁栄を懐古する知識人たちの情緒に通じるキャラクターである。范雲は梁の武帝即位の翌年、天監二年(503)に死んだ。官職は尚書右僕射、死去する少し前に、人事で武帝の不興を買っていた。沈約は天監十二年(513)に死亡。病気になった時、南朝斉最後の皇帝和帝の霊の祟りであると思い、齊から梁への禪譲は自分の発案ではないという赤章(天への願文)を奏上したことが武帝に知られて譴責され、恐怖のために死んだという(『梁書』)。尚書令に任命された。李綺は元和二年(807)十月に挙兵したが、十一月には鎮圧され、処刑された。この説話が李綺の反乱に言及するのは、安史の乱は平定されたものの、その後も様々な反乱が続く世相に、この説話の主題である王朝や文化の衰退を意識せざるを得なかった故であろう。

「李儋伯」は、実際に存在した侏儒による大道芸や手品のパフォーマンスを元に組み立てられた話であろう。しかし、本話は鬼話として解釈されており、小人の女は鬼であり、その出現は何らかの予兆として奏上されたのである。女の出現した崇仁里は東市と皇城に挟まれたエリアであり、まさに聖と俗が交錯する場所である。

冥界召喚譚

「李和子」は「鬼の三年が人間には三日に過ぎない」という時間観念に特色がある。また、市という空間が、鬼の苦手な物も好物も売っている場として、説話の舞台として機能している。

四 元和中興―卷三四四 鬼二十九―(唐憲宗・元和年間)

王裔老(『白居易集』) 華州下邽県(陝西省渭南市)の東南の延年里に無住の寺があった。元和八年(813)、翰林学士であった白居易は母の喪に服して下邽県で暮らしていた。七月に従兄の皞が華州から居易に会いに来る途次、この寺の中で十人ほどの黄色い綾絹の衣を着た女たちが座って話しているのを見た。しかし、喉が渇いていた皞が飲み物を乞いに寺の中に入ると誰もいなかった。女たちが話していた場所は塵が積もり、足跡もなかった。それで女たちが人ではないことを知り、皞はそのことを居易に語った。女たちの話には王裔老という名がよく出ていた。二人で現地に行ってみると、その地には本当に王裔老という里人がいて、寺の東北百余歩の場所に建てたばかりの家に明日引越す予定であるという事であった。しかし引越して十日にもならないうちに王裔老は死に、それから一ヶ月も経たずに妻も死に、さらに王裔老の二人の息子とその嫁たち、一人の孫が季節も変わらぬうちに立て続けに死んだ。一人だけ生き残った息子は新居が不吉であるとして、家を壊し植木を抜き、夜の内に立ち退いて死を免れた。

張弘讓(『乾闥子』) 元和十二年(817)、寿州(安徽省寿县)の小將張弘讓は兵馬使王暹の娘を娶った。淮西(淮南の西部)では軍務が急を告げており、令狐通が刺史としてその任に当たっていた。張弘讓の妻は

夏から重い病となつて数ヶ月に及び、張弘讓は妻が食べたい物がある度にそれを作つてやつていた。冬十月になり、妻は湯餅を食べたがり、張弘讓は作つてやろうとしたが、軍より冬服支給の呼び出しがあり、仕上げを仲間の王士徴の妻に頼んで出かけた。王士徴の妻が出来上がった料理を張弘讓の妻の元に持つて行くと、目の前で張弘讓の妻は額や鼻から全身が縦に真つ二つに裂けて、そのうちの半身のみが寝台に残つていた。

王士徴の妻は悲鳴を上げて軍営に知らせ、役人が取り調べたが、二人の婦人の間に怨恨もなく、このような事が起きた理由は不明であった。張弘讓が走り帰り、葬儀場に行くと、空中から妻が泣きながら「御婆様に子守に召喚されました。あなたにはご迷惑をおかけしますがどうにもならないので、お見捨てにならないでしたら御婆様の頼みを聞いて下さい。」と言つて、張弘讓に住まいの裏の李の木に四つに分けた食べ物をお供えて祈らせた。すると、空中から「お前の新妻を返そう」という声が聞こえて、にわかにな身の遺体が下りてきた。妻の声に従い、半身の遺体どうしをきちんと合わせて寝具でくるみ、三日経つと妻は蘇生した。温継ぎ合わせた痕が残つたが、一年後には回復し、数人の子を産んだ。温庭筠の旧友の龐子肅が実際に見た出来事である。

**寇鄴（乾驥子）** 上都（西安市）永平里の西南隅の小宅は、大暦年間（766～779）、安太清が二十万銭で買つて以来、持ち主が十七代替わつたが、皆長男を亡くし、羅漢寺に寄付された。寺は人に貸そうとしたが借り手が見つかず、元和十二年（817）に権利書つきで原価で売り出したところ、公卿の屋敷に出入りしていた日者（日の吉凶を占う）の寇鄴が四万銭で買い取つた。しかし、夜中に人の泣き声がするので、寇鄴は崇賢里法明寺の僧普照に宅内に道場を作つて住んで貰つた。七日目に普照が庭に何者かを見つけて追い、「この賊め、どれほどの人を殺した」

と喝し、寇鄴に七家粉水で穢れを払わせ、門の崇屏（門内の目隠しの壁）を水をかけて柳の枝で撲つと、崇屏の下の土が四尺ほど崩れ、その中から青羅裙、紅袴、錦履、緋衫子を着た女の骸骨が出てきた。普照はこれを渭水の沙洲に葬り、以後は恐ろしいことは起きなかつた。

この小宅は、そもそもは郭子儀（汾陽王）の夫人が、夫の従姉妹である永平里の宣化寺の尼僧の許に詣でる際に、扈從してきた者たちを置くために買ったものであつた。青衣（召使いの女）の中に不謹慎な者がいたので誅して夫人が其処に崇屏を築かせたとも、生き埋めにしたとも伝えられており、それより怪異が起きるようになったという。

**呼延冀（瀟湘録）** 咸和年間（渤海国の元号。831～875）、呼延冀は忠州（重慶市）の司戸（民政を担当する官）に任じられ、妻を連れて任地に向かう途中、泗水（山東省）で盗賊に身ぐるみを剥がされ、付近の老翁の屋敷に泊めて貰つた。老翁は、自分の家にいるのは老母だけだから妻をここに留めて、まずは呼延冀のみ赴任してはどうかと勧め、呼延冀はその言に従つた。呼延冀が任地に到着し、妻を迎えに行く算段をしていると、妻から手紙が来た。手紙には、妻が歌妓の娘に生まれ、宮中に入り歌や踊りを褒められたものの後宮の縮小で出され、呼延冀とは放逸な者同士で交際を始めたにもかかわらず正式に娶つてもらい、周囲からは才子佳人と称され、睦まじく暮らしていたことから書き起こし、思いがけず荒涼とした田舎に置き去りにされて夫の薄情を恨み、自分を慕う翁の若い息子に既に身を委ねた事が記されていた。激怒した呼延冀は官を棄てて泗水に戻り、翁も妻も殺すつもりであつたが、屋敷は見つからず、その場所には大きな塚があつた。塚を壊すと妻の遺体の中にあつたので取り出して別の場所に葬つてから去つた。

**安鳳（瀟湘録）** 寿春（安徽省寿县）の安鳳と徐侃は才学があり、と

もに長安で任官することを約した親友同士であった。しかし、孝行の念の強い徐侃は涕泣する母と別れるに忍びず、安鳳のみ長安に行った。十年が過ぎたが、志を未だ遂げぬ安鳳は恥じて故郷に帰ることも出来ずにいたところ、徐侃と再会した。悲喜交々で数日を共に暮らしたが、徐侃は故郷を離れて一年になり、母が心配するので帰ると言い、安鳳にも共に帰郷するよう誘った。しかし、志を遂げるまでは帰れぬという安鳳の気持ちには変わらぬ、二人は詩を贈り合って別れた。翌年の春、安鳳はまだ長安にいた。徐侃の夢を見たので手紙を送ると、手紙を届けた人に徐侃の母が、徐侃はすでに三年前に死んでいることを告げた。それを聞いた安鳳は、涙を流して「徐侃の別れの詩の泉下亦難忘（泉下にありてもまた忘れがたし）の意味がようやく分かった」と言った。

**成叔弁**（『河東記』） 元和十三年（818）、江陵（湖北省荊州市）の良民、成叔弁のもとに田四郎という者が仲人を連れて来て、成の十七の娘、興娘との婚姻を求めた。田四郎は容貌が醜く、成叔弁は断つたが、天から二人の人が下りてきて「すでに興娘の魂は田四郎を慕っている」と言うのと、興娘が部屋の中で「田四郎に嫁いで、ともに行く」と叫んだ。成叔弁は彼らが人ではないと覺り、「お言葉に従いますので、まずはお座り下さい」と頼み、果物や茶菓子を用意させて堂に座を整えた。四人と成叔弁は着座し、仲人が「お三方とも詞をなさるのだから、連句を皆で作って縁談をまとめましょう」と提案した。田四郎が「一点の紅裳、翠微を出づ 秋天雲静かにして月離離たり」という句を作り、成叔弁に句を継ぐよう促した。叔弁は学がなかったので固辞しようとしたが、突然、堂上から「どうして『天曹の使者、徒だ回首せよ、何ぞ他に従わず、九族は卑きに』と言ってやらないのか」という声があった。すると四人は大笑い「先に魔物であることを言われては、今更どうにも出来ないな」と

言って走り去り、再びやってくることはなかった。娘は酔ったようにおかしな事を口走っていたが、四人がいなくなると正常に戻った。

**襄陽選人**（『酉陽雜俎』） 于頔が襄陽（湖北省襄陽市）を治めていた頃、その地の選人（科挙合格者）の劉某は上京の途次、二十歳ぐらいの言語明らかな拳人（進士科の科挙受験生）と知り合い、同行すること数里、意気投合して、草の上で共に酒を飲んだ。日暮れに拳人は自分の家に来るよう誘ったが、期日があるので劉は断り、拳人は詩を賦した。「流水涓涓として芹芽を長ぜしむ 織鳥双び飛び客家に還る 荒村寒食を作る人無く 殯宮空しく対す棠梨の花」翌年、劉は襄陽州に帰り、拳人を訪ねてゆくとそこには殯宮があるだけだった。

**祖價**（『会昌解頤録』） 進士の祖價は祖詠の孫である。科挙に落第した後、商山（陝西省）を旅したが、路銀が乏しくなったので、空き寺に泊まって秋の月を眺めていると、寺の背後から人が現れ、祖價と経史について語り、時々詩を吟じた。祖價は茶を煮て勧めた。その人は、偶然祖價と出会えた心境を詩に賦し、それを再三吟じて、夜更けに帰って行った。翌日、人に聞くと、そのあたりには人は住んでおらず、客死した書生が仏殿の背後の南岡に葬られているのみとのことであった。祖價はその詩の内容から昨晚の人が幽霊であることを知り、弔文を作って供養した。

「卷三四四 鬼二十九」では、憲宗の元和年間の中期を扱う。この時期、憲宗は衰えていた唐の威信を回復し、その治世は元和中興と呼ばれた。収録されている説話に鬼から妻や娘を取り戻す話が多いのは、安定に向かう世相を反映したもののか。

#### 冥婚譚

「呼延冀」は、未婚のまま死んだ息子のために老翁が夫婦を計略に嵌

めて、妻を鬼の世界に引きずり込んでゆく異色の冥婚譚である。書簡という形で妻の追い詰められた心理を詳細に描く手法も注目される。

「成叔弁」は、鬼が天人のふりをして娘を取ろうとしたが、天の代作してくれた連句が成叔弁を救う話で、詩話とも言える。『天曹の使者、徒だ回首せよ、何ぞ他に従わず、九族は卑きに』という句は「天の使者のふりをする者よ、そのまま帰れ おまえの一族は卑しい鬼であるのに何故人に従わないのか」という意味。

#### 変鬼帰還譚

「安鳳」は、鬼となった徐侃の詩が眼目であるが、都での人脈作りが上手くいかず、故郷にも帰れない安鳳は時代の人間像の一つの典型であろう。

#### 冥界召喚譚

「張弘讓」は、変則的な冥界召喚譚である。冥界に召喚されて死んだ人間が蘇生するという点では定石通りであるが、罪や寿命のためでなく冥界に召喚される理由は、男の場合はもっぱら裁判や冥官への任官のためであるのに対して、本話では子守のためとなっている。身が二つに裂けて召喚されるのも他に例を見ない。

この説話の時代背景は、本文中に「淮西の用兵、方に急たり」と説明され、元和十二年(817)という年が設定されている。淮西節度使呉小陽の息子の呉元済が、父の死後、その喪を隠して父の名で自らを留後(節度使不在時の本拠地の責任者)にするよう朝廷に奏上したが却下され、反乱を起こし、朝廷が討伐軍を派遣し、呉元済を捕らえて処刑したのが、元和十二年であった。安史の乱から半世紀以上が過ぎ、藩鎮は割拠勢力となりつつあったが、この軍事行動によって朝廷は威信を回復し、他の藩鎮も唐に帰順した。

#### 鬼神遭遇譚

「襄陽選人」に名に見える于頔が襄州を治めていたのは憲宗の即位前、徳宗の時代である。于頔は貞元十四年(798)に襄州刺史及び山南東道節度觀察使に任命され、当時の節度使の典型として跋扈した。

「祖價」は、王維との交友がよく知られた詩人祖詠の孫を主人公にして鬼詩三首を録す文学的趣きの濃い作品である。

#### 凶宅鬧鬼譚

「王裔老」において王が新居を建てた場所は、もとは黄色い綾絹の衣を着た女鬼たちの塚墓のある場所であったのであろう。

「寇鄺」において、凶宅の由来が、安史の乱以来、数々の武勳を建てた名将郭子儀の妻と関係があるのは大変興味深い点である。皇太子李恒(後の穆宗)の実母であり、憲宗の宮中で大きな勢力を形成していた郭貴妃こそ郭子儀の孫娘であったからである。

#### 五 憲宗の時代の終焉―卷三四五 鬼三十一(唐憲宗・元和年間)

郭承嘏(『尚書談録』) 郭承嘏は法書(書体の手本帳)一巻を大切に、常に携えていた。科挙の雑文科の試験を受けた際、夜まだ早い時分に書き終えたが、誤って法書を提出して宿に帰ってしまい、気がついて試験場の門前をうろろろしていると、老吏がいたのでありのままに話した。老吏は答案を入れ替えることは出来るが、自分の家は貧しいので銭三万を報酬として貰いたいと言いい、承嘏が承知すると、老吏は答案を入れ、法書を取り出して承嘏に渡した。翌日、承嘏が自ら興道里の老吏の家に金を届けに行くと、その家の者が、老吏が死んで三ヶ月になるが、貧しいのでまだ死に装束を整えられていないと話した。承嘏は自分が会った

のが幽霊であったと知り、金をその家に贈った。

**張庚**（『統玄怪録』） 進士（進士科の受験生）の張庚は元和十三年（818）、長安の昇道里南街に住んでいた。十一月八日の夜、僕は他宿しており、張庚が一人でいると、突然庭じゅうに異香が満ち、年十八九のこの上なく美しい青衣（腰元）たちが門を開いて入ってきた。青衣たちは「月夜の絶景を探すのに楽遊原に行くことはないわ。この庭の小さな藤棚で十分。」と言い、少女七八人を連れていたが、これらもみな美しく、服装も華麗で、裕福な貴族の家人のようであった。張庚は堂に逃げ込み、簾越しに様子を見てみると、青衣たちは藤棚の下に宴席を設け、八人が輪になって座し、楽器を演奏する者や左右に伺候する者がそれぞれ十人いた。演奏が始まろうという時に、座っているうちの一人がこの家の主人を招いても良いのではないかと言い、青衣に張庚を呼びに行かせたが、張庚は扉を開かなかった。女たちの酒宴が始まり、張庚は、この坊（区画）の南街は廢墟と墳墓で人は住んでいない、坊中の人も坊門が閉ざされているから通れない、女たちは妖狐でなければ幽霊に違いないと考え、寝台を支えている石を取って宴席にぶつけた。女たちは散り散りに逃げてゆき、張庚は白い角杯を一つ奪った。庭の香気は数日残り、角杯は訪れた張庚の親類や知人で伝え聞いて見ぬ人はいなかったが、誰も来歴は分からず、十日あまり後、地面に落とした際に消えてしまった。張庚は、翌年、進士に及第した。

**劉方元**（『博異記』） 隱者の劉方元は漢南（湖北省）から巴陵（湖南省岳陽市）に至り、夜、江岸の古い館に泊まった。その館の西には籬で隔離されたはなれがあり、中に広間があったが、怪事が多く、已に十年閉ざされたままであった。劉方元はそのことを知らず、二更を過ぎて月夜に籬の西で婦人たちが談笑しているのを聞いた。年老いた青衣が「幼い

頃お世話をしていた阿荊様が木馬から墮ちて傷めた私の左腕が痛むから明日は雨だろう。いまや高官となった阿荊様は私はどうなっているかもご存じない。」と言った。か細く清らかな歌声や、哀切な詩吟も聞こえ、四更になって止んだ。翌朝は果たして大雨で、劉方元は館の役人から西の場所の事情を聞いて中に入って見たが、人跡はなかった。広間の柱に書いたばかりの詩があり、その文言を見るに幽霊の書いた詩であった。役人は「ここには人が住んだことがないし、こんな詩が書かれていたこともない。」と言い、調べても分からなかった。

**光澤坊民**（『西陽雜俎』） 元和年間（806～820）、光宅坊の民の家に病人がいて、僧に祈禱をして貰った。妻子の見守る中、夕方に人が入ってきて、追ひ払おうとすると甕の中に逃げたので湯を注ぐと、袋があった。幽霊が人の気を奪う袋のようで、空中から声がして「袋を返してくれば、別の人を取って病人の代わりにする」というので投げて返すと、病人の病は癒えた。

**淮西軍將**（『西陽雜俎』） 元和の末、淮西（淮南の西部）の將軍が汴州（河南省開封市）に使者として赴き、宿駅に泊まった際、夜中に何物かに体を押さえられたが、押し返して革袋を奪った。幽霊が暗闇から返却を懇願するので「この物の名を言えば返してやる」と將軍が言うと「蓄気袋だ」と答えた。將軍が煉瓦で幽霊を打つと、声は聞こえなくなった。袋は数升を盛ることが出来、日光の許でも影がなかった。

**郭翥**（『宣室志』） 元和年間、かつて鄂州武昌（湖北省武漢市）の尉であった郭翥は沛国（江蘇省徐州市）の劉執謙と仲が良く、二人は先に死んだ方が冥界の事を告げに現れることを約束し合っていた。その後、劉執謙が死に、数ヶ月後の夕方、華陰（陝西省渭南市）に住んでいた郭翥の許にやって来た。郭翥は顔を見たいと言ったが、劉執謙は燭を消すこ

とを求めた。寝台で劉執謙は往事や冥界の事を語ったが、深夜に酷い悪臭がするので、郭翥が劉執謙に触ってみると、体が大きく劉執謙ではないと分かった。郭翥が気づかぬふりで相手を圧迫して動けないようになり、朝になって見ると七尺もある胡人の死体であった。暑い時分、近寄れないほど汚なかつたので、人に郊外に棄てに行かせると、見に来た里人の中に、これは数日前に死んだ自分の兄で、昨日突然遺体がなくなつたのだという者がおり、死体を持ち去つた。

**裴通遠**（『集異記』） 憲宗が景陵に葬られた時には、都じゅうの人が集まつた。前の集州（四川省巴中市）司馬裴通遠の家は崇賢里にあり、その妻や娘も通化門に行き、車から見物した。帰りは日暮れになり、平康北街で白髪の老婆が車の後から息も絶え絶えに走ってくるのが見えた。天門街まで来ると夜を告げる太鼓が打たれ、車馬は速度を上げ、老婆も慌てて駆けた。車中で四人の幼い娘に付き添っていた老いた青衣らの一人が老婆を哀れみ、行き先を聞くと同じ崇賢里だったので、車に乗せてやった。到着すると、老婆は礼を述べて錦の袋を残して去つた。袋を開けてみると、遺体の為の薄絹の面覆いが四枚入っており、女たちは驚いてそれを道に棄てた。それから十日も経たぬうちに四人の娘は相い次いで亡くなつた。

**鄭紹**（『瀟湘録』） 妻を亡くして再婚を望んでいた商人の鄭紹は、旅先の華陰（陝西省渭南市）で、鄭紹に一目惚れをした南宅の皇尚書の娘の邸宅に招かれた。娘は、両親は既に亡くなっており、街中を嫌って華山のあたりに住んで良縁を求めて三年になるのだと言い、鄭紹と結婚することを求めた。二人は夫婦となり、快楽の中で一ヶ月が過ぎ、鄭紹は仕事のため旅に出ようとしたが、妻に引き留められて、さらにひと月が経つ

た。鄭紹は、商売に出かけられなくてはどんなに愛されても楽しめないことを述べ、妻も鄭紹の言葉が切実であつたので許した。翌年の春に鄭紹は帰ってきたが、そこで見たのは紅花翠竹、流水青山のみで、杳として人跡はなかつた。鄭紹は慟哭し、翌日になって帰って行つた。

**孟氏**（『瀟湘録』） 維揚（江蘇省揚州市）の大商人萬貞の妻の孟氏は、もとは寿春（安徽省寿县）の妓女であつた。孟氏が庭でひとり詩を吟じて涙を流していると、美しい若者が垣根を跳び越えて入ってきて、孟氏の詩吟に感動したと言ひ、語り合うことを求めた。孟氏は、夫が何年も帰つてこない離別の悲哀を吟じたのだと言ひ、若者は、先には雅びな吟詠を聞き、いま美しい容貌を見て、命を懸けても良いと思つたのだから人に後ろ指を指されてもかまわないと求愛した。孟氏と若者は互いの心情を詩に詠み、ついに私通した。一年が過ぎた頃、夫が帰ってきて、孟氏は憂いて泣いたが、若者は「長くは続かないと分かつていた」と言うや身を翻して、あつという間に消えてしまつた。如何なる物の怪であつたのか、ついに分からなかつた。

「卷三四五 鬼三十」は、主に憲宗の元和年間の後期を時代背景とし、憲宗の死にも触れる。節度使の跋扈を抑え、元和中興を為し遂げた憲宗が急死したのは、元和十五年（817）正月のことである。宦官らによって暗殺されたと言われている。享年四十三歳であつた。

#### 冥婚譚

「鄭紹」は、商人という従来の冥婚譚の主人公とは異なる行動原理を持つ人間像が描かれる。都市と商業の発達してゆく時代相の反映であるう。

「孟氏」は商人を妻の側から見た物語になつてゐる。利を求めて旅の

日々を送る夫に寂しさを募らせる妻は、刹那的な快樂のみを求める若者との不倫に陥る。若者の正体が鬼でなくても成立する、都市の新興階級としての商家を描く作品である。

#### 変鬼帰還譚

親友同士が死後の世界についての報告を約束し合うというのは変鬼帰還譚の定型の一つであり、「郭蒼」は途中まではこの話型に則るが、後半は鬼と争う鬼神遭遇譚となり、本質的には死体を操作する鬼によって引き起こされた怪事である。死者に化ける鬼の話としては、「卷三三〇」鬼十五 僧韜光、「卷三三九」鬼二四 李則「などもある。

#### 冥界召喚譚

「光澤坊民」と「淮西軍将」は蓄気袋についての関心が主題であり、これらの鬼は寿命の尽きた人間の命を奪うことを仕事としている冥吏である。

#### 鬼神遭遇譚

「郭承嘏」における鬼は人に利をもたらす類いの鬼であるが、その動機には自らや家族のために、死者自身が葬儀の費用を工面しなくてはならないという切実な事情がある。

「張庚」は自宅の庭から取り戻す話。志怪小説の世界では、鬼や怪は平常心を保ち、冷静に対応する人間には勝てない。色香に惑わされることの無い点も、儒教的文脈における正しさがあり、科挙合格という結末に繋がる。

「裴通遠」は、憲宗の大喪を見物する人々の様子を伝えるルポルタージュ的側面もある作品である。老婆の正体は鬼であったのか、四人の少女を取り殺したのか、実は不明である。少女たちの死の運命を知り、それを示唆したにすぎない可能性もある。そうであればこの話は「冥事占

判譚」ということになる。本話は、憲宗の不自然な急死を背景に、不可解な死を描く。正史と鬼話は不即不離の関係なのである。

#### 凶宅鬧鬼譚

「劉方元」の老青衣の語りは、人間であった頃の記憶だけをよすがに永い時を闇の中で過ごす鬼の心の内面が窺われ、哀切を極める。この説話では劉方元と鬼の間には直接の交渉はなく、青衣たちの語りや歌、詩吟は自身や悲しみを共有する他の鬼に向けたもので、劉方元を意識したものではないため、その悲哀は一層際立っているのである。

#### まとめ

「鬼二十六」から「鬼三十」は、背景となる時代が徳宗の貞元年間から憲宗の元和年間までの8世紀の終わりから9世紀の初めの時期であり、科挙官僚や商人などの新興勢力の台頭や、藩鎮の跋扈とそれを抑え付けて回復する朝廷の威信、都市や市の活性化等の諸現象が、直接、間接に鬼話の内容にも影響を与えていることが看取された。

また、人間とその心理を描く文学的技法の発達も鬼話の内容に大きな変化をもたらし、類型的展開の説話は減少し、複数の話型を融合させたストーリー展開を見せる説話や、リアリズムに立脚した描写で鬼が現実的な人間性を帯びて描写される作品が生まれ、人ならぬ鬼を描くということの意味が問い直されることとなった。

注

- (1) 『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第21号(2015)
- (2) 『日本女子大学紀要人間社会学部』第26号(2016)
- (3) 『日本女子大学紀要人間社会学部』第27号(2017)
- (4) 『日本女子大学紀要人間社会学部』第28号(2018)
- (5) 『太平広記』本文については、汪紹楹校点『太平広記』(中華書局 一九六一)に拠った。また各説話の解釈においては、木村秀海監修・堤保仁編『訳注 太平廣記 鬼部三』(やまと崑崙企画 二〇〇四)を参考とした。
- (6) 『中国古代小説百科全書』(中国大百科全書出版社 1993) 程毅中「異聞集」

### The ghost stories of “Taiping Guangji” vol.26~vol.30

MITTA Akihiro

[Abstract] “Taiping Guangji (Extensive Records of the Taiping Era)” is a collection of stories compiled under the editorship of Li Fang, first published in 978. The book is divided into 500 volumes and 40 volumes of them are ghost story parts. In this paper, I have analyzed vol.26~vol.30 of the ghost story parts. The results of the analysis, I have cleared ideological features and features on the story type of Tang dynasty early ghost stories.